

Ｈ24 年度霧多布沖合調査

NPO法人エトピリカ基金



IV. 「エトピリカ学校」の一環として行った霧多布沖合調査

1) 目的

北海道東部に位置する浜中町霧多布周辺ではエトピリカやケイマフリといった希少海鳥の保護・調査活動が展開されているが、最も基本となる海上の鳥類相とその季節変化については不明な点が多い。当基金では 2010 年 4～9 月に小型漁船による霧多布沿岸の海鳥・海獣調査を、岬からの定点調査と合わせて行なった。これらの調査により春から夏の、沿岸域における海鳥相やその特徴が明らかになった一方、沿岸域に偏った調査であったため外洋性の種が記録しづらい、また繁殖期前後の調査だったため希少種を含めた非繁殖期の分布は不明のままであり、調査範囲を時間的にも空間的にも拡大する必要性が課題として残った。そこで 2011 年度は、調査範囲を沖合 35km 程度にまで拡大し、非繁殖期にも調査を実施することによって、季節ごとの広域の海鳥相を把握できるよう努めた。これらによりミズナギドリ類やアホウドリ類、外洋性のウミスズメ類を含む海鳥相についてある程度明らかにできたと考えられるが、海鳥の分布は季節や年、餌生物等に応じて著しく変動するため限られた回数、単年度の調査では希少海鳥保全への応用も含め、十分とは言えない。また、海洋生態系における高次捕食者である海鳥・海獣を海洋環境変動の指標として、それらを軸に海洋生物と人間との共存を考えるに当たっては長期間のモニタリングに裏打ちされたデータが必要である。そこで、2012 年度はそのための体制構築の基礎として、前年度と同様の沖合調査を実施すると同時に、前年度までは限られた調査員のみで行っていた調査に学生等の若手に参加してもらい、海洋生物の調査や保全を積極的に担うことのできる人材育成にも力を注いだ。

2012 年度も霧多布岬からの定点調査を合わせて実施したが、その結果や沖合調査との比較は V 章を参照いただきたい。

2) 調査方法

調査は 2012 年 5～12 月に計 9 回行なった。原則として月 1 回であるが、エトピリカやカムリウミスズメといった希少ウミスズメ類の確認の多い 7、8 月には各月に 2 回行なった。また、9 月は海況が悪く、計画はしたものの調査はできなかった。調査は「第八栄徳丸」（堀場伸也船長 4.9t；写真 1）を傭船して行なった。堀場船長には記して謝意を表す。

調査地は北海道厚岸郡浜中町の海域で、基本的なルートは以下の通り；同町霧多布港を出港して浜中湾を東進、約 5km 沖合のホカケ岩を經由してそこから 7km 程度東の北緯 43 度 05 分、東経 145 度 16 分付近で南へ変針し、約 30km 先の北緯 42 度 50 分、東経 145 度 19 分付近で西へ変針。12～13km 西方の北緯 42 度 50 分、東経 145 度 10 分付近で北へ変針し、霧多布岬東方海上を經由して霧多布港に戻る（図 1）。上記の 5 時間半～6 時間半の

ルートが基本となるが、月によってより手前側や沖合側のコースをとることもあった(図2)。本年度の調査でコースが通常と大きく異なったのは6月27日と11月22日の2回で、前者は沖合で操業中のサケマス流し網漁を避けて沿岸寄りのコースで、後者は外洋の風浪が強かったため、浜中湾内を中心に調査を行なった。

各月の調査日、時間、気象条件を表1に示した。調査時間は日長や海況、他の漁との兼ね合い等で月によって異なるが、結果としてほとんどの調査が午前中から午後の早い時間にかけて行なわれた。

調査は、船の舳先の左右に各1名以上の調査員を配置して行ない、それらの間に記録係が入り、調査員が口頭で伝える情報を野帳に記録した。港を出てから戻るまで、通常より低速(10ノット前後)で航行し、調査員は10倍前後の双眼鏡で目視調査を行なった。原則として片側約200m(両側400m)に出現する鳥類ならびに哺乳類について、発見時刻、種、数、行動(飛翔、海上、上陸等)、左右の別等を記録した。距離や角度等により種まで同定できない場合は、「ウミガラス sp.」や「ミズナギドリ類」等種より上位の分類群で記録した。また、岸壁から港の出入口までの漁港内はカモメ類やカラス類等、人間活動によって誘引された鳥が明らかに多いと考えられたため、種のみ記録し、個体数ほかは記録しなかった。出現した海鳥、海獣類は、可能な限り400mm望遠レンズを装着したデジタル一眼レフカメラ(Canon EOS7D)で写真撮影を行ない、識別や羽衣の調査に役立てられるように心がけた。また、出港から帰港まで、GPS(Garmin社製GPSmap62SJならびに同60CS)で位置情報を取得した。

表1 調査日ごとの時間及び観察条件等

年	2012								
月	5	6	7		8		10	11	12
日	27	27	8	29	3	21	8	22	3
時間	4:57- 10:26	7:24- 13:01	8:41- 14:25	9:28- 15:05	8:39- 14:23	9:28- 13:54	6:49- 12:19	6:23- 11:35	6:26- 12:05
天気	曇り	晴れ	霧雨	曇り	曇り	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ
波	1m	0.5m	0.5m	1m	0.5m	1.5m	1.5m	1.5m	1m
風(m)	北1	北東1	東1	0	南1	0	南2	南1-4	0
視程	水平線	水平線	200m-	水平線	300m-	水平線	水平線	水平線	水平線

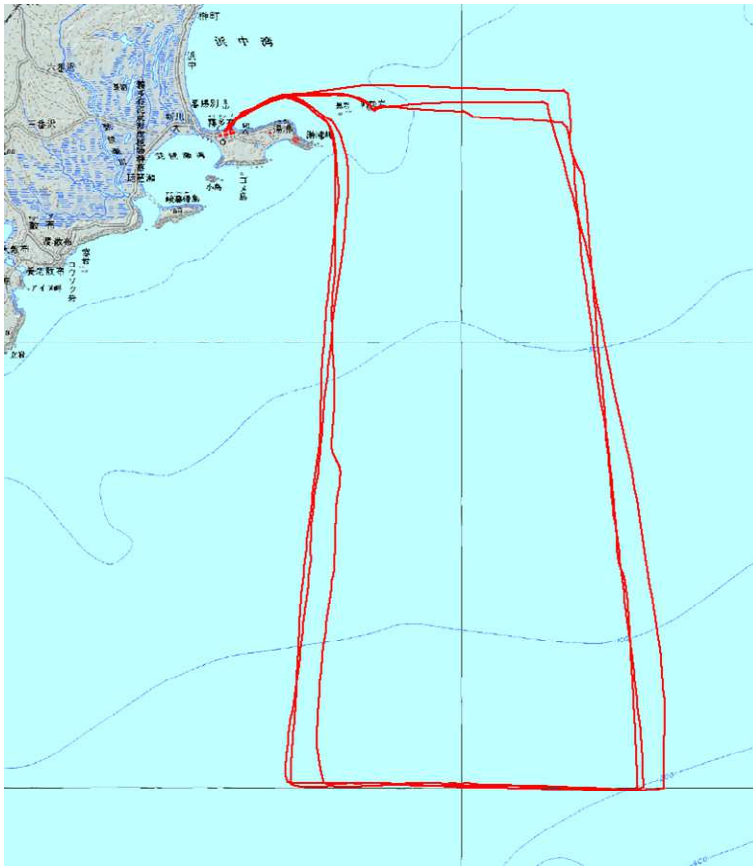


図1 調査ルート（設定コース）

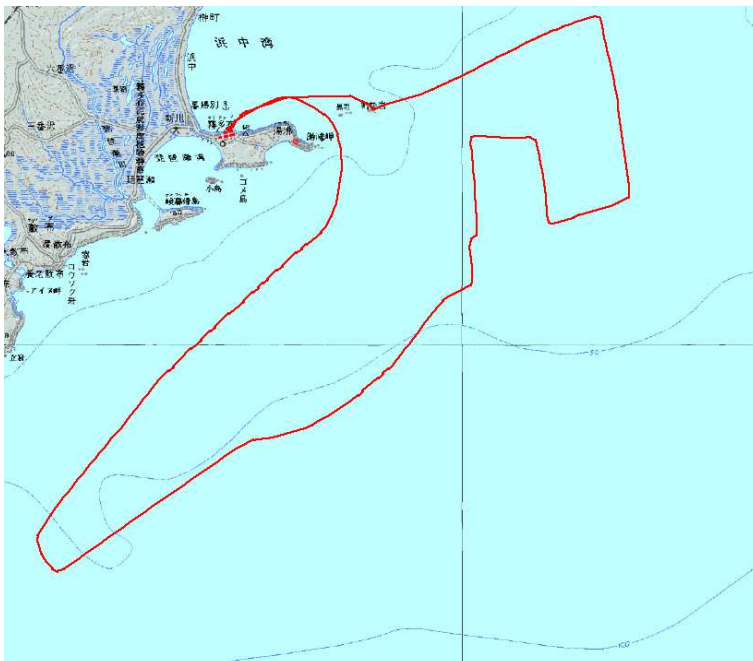


図2 調査ルート（設定コースより沿岸：6月27日）

3) 結果ならびに考察

第1部 海鳥

(1) 出現した科ならびに種数

9回の調査で表2に示したように、15科59種の鳥類と28の不明カテゴリ（「ヒレアシシギ sp.」、「ミツユビカモメ?」、「スズメ目鳥類」等）が記録された。不明カテゴリは観察条件が悪いため種の同定に至らなかったものが大部分で、海鳥では未記録の種を含んでいる可能性はきわめて低い。「スズメ目鳥類」や「小鳥類」は海上を渡っている小鳥を一瞬観察したが種や科の同定まで至らなかったもので、59種以外の種である可能性が高い。調査回数と同じだった2011年度は17科58種が記録されており、種数としては大きな変化はなかったといえる。59種の鳥類のうち、アマツバメ、ミサゴ、オジロワシ、オオワシ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハクセキレイの7種は陸鳥であり、またキンクロハジロ、カワアイサ、キョウジョシギは淡水域や汽水域、海岸等を主に利用する水辺性鳥類である。したがって、これら10種を除いた10科48種が2012年度に記録された海鳥といえる。海鳥のうち、2011年度の本調査で未記録なのはコクガン、ハジロカイツブリ、ハシジロアビ、オオトウゾクカモメ、マダラウミスズメ、ウミオウム、ツノメドリの7種であった。

海鳥のうち科ごとの種数では、ウミスズメ科が13種と最大で、カモメ科の10種、カモ科とミズナギドリ科の各6種がそれに続き、それ以外の科はそれぞれ2~4種であった。この傾向は前年度に類似するが、前年度はウミスズメ科とカモメ科が各10種で共に1位だったことから、ウミスズメ科の記録種数が多かったのが今年度の特徴といえよう。原因は不明だが、6、7月に例年は稀なツノメドリが繰り返し観察されたこと、前年度の調査では未記録だったマダラウミスズメ、ウミオウムが新たに記録されたことによるものである。

表2 調査日ごとの海鳥類の種別確認数（その1）

科名	種名／月日	5	6	7		8		10	11	12
		27	27	8	29	3	21	8	22	3
カモ	コクガン								3	
	キンクロハジロ	●								
	シノリガモ	7					2	2	8	7
	ビロードキンクロ								166	9
	クロガモ	6						10	1014	810
	コオリガモ								233	124
	ウミアイサ									●
	カワアイサ									3
カイツブリ	アカエリカイツブリ							2	8	7
	ハジロカイツブリ									●
アビ	アビ								5	4
	オオハム	3							1	
	シロエリオオハム	5			2		1	32	1	80
	ハシジロアビ									1
アホウドリ	コアホウドリ	9	6	6	81	98	10	59		
	クロアシアホウドリ			39	29	57	25	9		
ミズナギドリ	フルマカモメ	18	1001	15	1892	31484	33		94	74
	オオミズナギドリ				1		152	11		
	ミナミオナガミズナギドリ							11		
	ハイイロミズナギドリ	4	12913	717	410	201	1731	95		
	ハシボソミズナギドリ	189	100	7		2013				
	アカアシミズナギドリ				2	1	2	3		
ウ	ヒメウ	73	5	67	36	7	6	46	195	132
	ウミウ	34	45	87	39	27	39	26	43	121
アマツバメ	アマツバメ	1	●				●			
	キョウジョシギ	14								
シギ	アカエリヒレアシシギ	138		8	3	198	30			
	ハイイロヒレアシシギ	5		19	1358	595	32	1		1
カモメ	ミツユビカモメ							489	1	777
	ユリカモメ							5		
	ウミネコ	12	67	52	42	39	46	42	4	
	カモメ								3	196
	ワシカモメ							●	1	
	シロカモメ								2	4
	セグロカモメ							20		1
	オオセグロカモメ	89	202	96	81	50	63	99	75	186
	コシジロアジサシ						3			
	オオトウゾクカモメ				1		1			
トウゾクカモメ	トウゾクカモメ				1	4	6	16		
	クロトウゾクカモメ	2				1		5		

表2 調査日ごとの海鳥類の種別確認数（その2）

[illegible]

(2) 貴重種について

表 3 に示した通り、確認された 59 種の鳥類の 1/4 以上に当たる 16 種が環境省や北海道、国際自然保護連合（IUCN）等のレッドリストや天然記念物等に指定されている貴重種であった。16 種の希少鳥類のうち、3 種は猛禽類（ミサゴ、オジロワシ、オオワシ）で、いずれも海岸や海上で魚や海鳥等を狩る種であり、これらの猛禽類にとっても霧多布の海域は重要な役割を果たしているといえる。残る 13 種はいずれも海鳥であり、半数以上の 7 種はウミスズメ科鳥類であった。本年度記録されたウミスズメ科鳥類は、上記の通り 13 種であるのでその半数以上が貴重種である。これらのことから霧多布海域は希少海鳥、特にウミスズメ科鳥類の希少種が多く確認される、国内でも屈指の貴重な海域と考えられる。

表3 調査日ごとの海獣類の種別確認数

[illegible]

（３）ウミスズメ科鳥類各種の確認状況

エトピリカやケイマフリを含むウミスズメ科鳥類は、寒流域の海鳥群集の中でも位置を占める上、上記の通りその半数以上が貴重種であるため、以下種ごとの確認状況について概説する。

①ハシブトウミガラス

12月3日に36羽が記録された以外は、6月27日、7月29日に各1羽、11月22日に2羽が出現したのみであった。本種は中部以北の千島列島やベーリング海等で繁殖し、主として越冬のため北海道近海を訪れる。12月以外の確認が少ないのはそのためで、おそらく少数の若鳥や非繁殖鳥が残っていたものが記録されたと思われる。前年度の1、2月にも51-74羽が出現しており、冬期には普通の種である。

②ウミガラス

11月までは6月27日、7月8日、10月8日を除く回で2～8羽が記録されたのみだったが、12月3日は65羽が出現し、ウミスズメに次ぐウミスズメ科の優占種であった。1983年まで根室半島沖のモユルリ島で繁殖していた本種は、現在道東での繁殖は絶えているが、歯舞諸島では繁殖しており、そこでの繁殖鳥や非繁殖鳥が夏期にも見られるものと推察される。12月の増加は冬鳥として渡来する、より北の個体群の加入を示唆しているかもしれない。

③ウミバト

5～10月には確認されず、11月に21羽、12月に4羽がそれぞれ観察された。11月の調査では風浪により浜中湾内に調査範囲が限定されたため、ダブルカウントの可能性も否めないが、羽衣や飛翔方向等からかなりの数のウミバトがいたのは確かである。本種はケイマフリ同様沿岸性が強く、多数が記録された11月下旬は主に数少ない冬鳥として渡来する本種の、渡来期に当たったため、沿岸域限定の調査で多数が記録されたのかもしれない。11月22日には全体的に白っぽく、翼の白斑が顕著な典型的な冬羽（写真19、21等）の他に、上面の灰褐色みが強く、胸に鱗模様があり、雨覆は羽先のみ白色の、第1回冬羽の若鳥と思われる個体も観察された（写真20）。

④ケイマフリ

10月までは5、6月に各1羽、8月3日に2羽が確認されたのみで、11月には60羽、12月には13羽がそれぞれ観察された。本種は浜中町内の小島でも繁殖し、霧多布岬の定点調査でもたびたび飛来が確認されているが、本調査における出現の少なさは本種の強い沿岸性を反映したものと考えられる。繁殖期後の9、10月には道東沿岸ではほとんど観察されなくなるが、同時期には沖合でもやはり観察されておらず、北方等緯度的な移動をしてい

る可能性がある。11 月における増加は、越冬のため飛来した個体によるものと思われ、11 月の 12 月より高い値は調査が浜中湾内に限定されたため沿岸性の本種が多く出現したためと考えられる。

8 月 3 日にホカケ岩付近で観察された 1 羽はその形態と翼上面も含めた全身が炭黒色で、目の周りの白色は不明瞭、脚は赤みがなく体同様の炭黒色であった。脚の色が鈍いことから幼鳥の可能性を検討したが、幼鳥であれば胸から腹にかけての体下面は暗色と白色の斑模様で下尾筒はかなり白く見えるはずであるが、当該個体はその部分も含め炭黒色であり該当しない。当日は多少の霧はあったがその影響による画像の写り方等によるものでないことは確かで、黒化個体等なのかもしれない。

⑤マダラウミスズメ

11 月 22 日に浜中湾内で冬羽タイプの 1 羽が観察された。本種は 2011 年の沿岸調査では 7 月に出現しており、十勝沿岸でも 2012 年 7 月に 1 羽が観察されているが、道東における繁殖の有無については不明である。本種は 1990 年代までは冬を中心に道東沿岸の海上で割と観察できたが、近年は観察例が激減しており、沿岸や霧多布岬・アゼチの岬での定点調査も含む当基金の一連の活動の中でも、上記 2 例以外は 2010 年 6、8 月に小島近海で 1 羽が観察されたのみである。

⑥ウミスズメ

7 月 29 日と 10 月 8 日を除くすべての回で出現し、確認数は 12 月 3 日に 320 羽で最多だった。前年度は 11 月 20 日に 320 羽の最多観察記録が得られており、近隣海域の状況からも 11 月中旬から 12 月上旬にかけてが、道東太平洋におけるウミスズメの秋の渡りピーク期と思われる。今年度は 12 月で調査が終了したためデータには現れていないが、前年度の調査から冬の後半に確認数は激減し、更に南下するものと思われる。7、8 月には確認数は 10 羽以下まで減少したが、8 月 3 日には成鳥 2 羽ヒナ 2 羽から成る家族群を観察した（写真 35-36）。ヒナは全身綿羽に覆われ、体も成鳥よりかなり小さい 1 ヶ月齢未満の幼い段階のものであった。船の接近に対して親が下尾筒を上げて先導し、ヒナは鳴きながらそれに従った。ヒナが鳴いたのは画像からの確認であるため、どのような声であったかは不明である。波のある海上では、成鳥の白い下尾筒はヒナにとってかなり有用な目印となっていたと思われる。沿岸親潮に乗って南千島方面から来た可能性もあるため、北海道内での繁殖とは言い切れないが家族群の確認は前年度に次ぐ 2 例目で、更に 2012 年には十勝沖でも少なくとも 3 組の家族群を確認しており、道東太平洋が本種の子育てにとって重要な海域であることは間違いないだろう。道東太平洋での家族群の確認はいずれも 7 月中旬から 8 月上旬で、そこから逆算するとヒナの孵化は 6 月下旬から 7 月上旬頃と思われる。日本海側の天売島では、ヒナの孵化は 6 月上旬から確認されており、道東で確認される個体群とは繁殖時期が異なる可能性がある。

6月27日には43羽が出現し、それらの中には冬羽ばい羽色の若鳥と思われる個体（写真33-34）のほか目後方の白線が明瞭な夏羽も少なくなかった。これらがどこかで繁殖している個体なのか非繁殖鳥なのかは不明である。

⑦カンムリウミスズメ

7月29日から8月21日までの3回で連続して記録された。確認数は8月3日の46羽が最大で、前年度7月の31羽を上回り、かなりの数の本種が道東に来遊していることが示された。分布が日本近海に限られ、個体数も少なく保護の重要性が高いながら非繁殖期の生態のよくわかっていない本種の、道東太平洋における現状を明らかにする必要性の高さから、これまでの本調査と十勝沖、釧路沖での海鳥調査で得られた本種の記録を整理し、2012年9月に日本鳥学会でポスター発表を行なった。以下、要旨を転載する。

＊

カンムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* は、伊豆諸島、本州から九州にかけての離島など日本周辺の黒潮域でのみ繁殖するウミスズメ科鳥類である。生息数は10000羽以下と推測され、IUCN（国際自然保護連合）のレッドリストではVulnerable、環境省の同リストでは絶滅危惧Ⅱ類に、また国の天然記念物に指定されている。本種が5月に雛とともに繁殖地を去った後の、非繁殖期の分布については、断片的な混獲や観察の記録はあるものの不明な点が多く、北海道では函館沖や知床半島で少数の記録があるが、迷鳥とされている。演者らは2009年以降、北海道東部の太平洋上で主に小型船を用いた海鳥の調査を行ない、本種が非繁殖期に北海道東部へ定期的に渡来していることを示唆する観察記録が得られて来たので報告する。調査は浜中町霧多布沖、浦幌町厚内沖を中心に、4～7トンの小型船で沖合20～35km程度までの範囲で行なった。10ノット程度の速度で航行し、出現した鳥類について種、個体数、行動等を記録した。本種に関しては、以下の事項が明らかとなった。

(1) 2009～2012年に15例95羽の観察記録が得られた。最も早い記録は7月9日、最も遅い記録は10月12日で、本種は7～10月に北海道東部に渡来していると思われる。2011年に継続的に観察された霧多布沖では、観察数は7月が最多で、10月にかけて漸減した。

(2) 観察された42群の群れサイズは、8羽の1群を除くとすべて4羽以下で2羽がもっとも多く(35.7%)、1羽(28.6%)、3羽(26.2%)がそれに続いた。ウミスズメと一緒に出現した1例を除き、群れはすべて本種のみで構成されていた。北海道東部での本種は大きな群れを作らず、単独か同種の小群で過ごしていると考えられる。

(3) 出現時の行動は海上、飛翔とも見られたが、7月にはすべての出現が海上で、飛翔は8月下旬以降にのみ見られた。8月前半以前は、換羽等により飛べない可能性がある。

(4) 羽衣に関して目先の白黒に着目すると、7月はすべての個体が目先の白い非生殖羽であったが、8月以降目先がぼんやりと黒い個体、9月以降目先の完全に黒い個体が現れ始め、

10 月にはそれらの方が多くなった。9~10 月に早い個体は生殖羽に換羽すると思われる。また、後頭の白色部の太さに着目すると、7 月と 10 月にはそれらが太く明瞭な個体が大部分だったが、8 月と 9 月には細くて不明瞭な個体も観察された。後者は総じて背、上面の色の黒っぽい傾向があり、若鳥かもしれない。

当日はこれらにくわえ、出現位置の岸からの距離や水深などについても、2012 年のデータをくわえて考察する予定である。

＊

同要旨は 2012 年 7 月 13 日時点のものであり、その後の記録も含め道東太平洋での記録は 21 例 171 羽となった。また、出現位置と水深、岸からの距離について解析を行なった結果、霧多布海域では水深は 40-80m を中心に 20-400m、陸地からの距離は 15-25km を中心に 5-40km の範囲に出現することが明らかとなった（表 A ならびに表 B）。このように岸から見えない範囲の沖合を好む本種の性質が、これまで道東太平洋での非繁殖期の生息の解明を遅らせて来たと思われる。

道東太平洋における本種の生態はまだ謎に包まれている部分が多く、海域の中でも最も多くの個体が観察されている霧多布周辺海域でその解明の行なわれることが期待される。

表 A

水深／海域／個体数	十勝	霧多布	その他	合計
0-20				0
20-40	1	2		3
40-60	1	17	1	19
60-80	3	15		16
80-100	3	8		11
100-150	3	3	1	7
150-200		2		2
200-300	1			1
300-400		3	1	4

表 B

陸からの距離(km)／海域／個体数	十勝	霧多布	その他	合計
0-5				0
5-10		5	1	6
10-15	1	6		7
15-20	1	13		14
20-25	4	16		18
25-30	4	3		7
30-35	2	2		4
35-40		5	2	7

⑧ウミオウム

12 月 3 日に 1 羽が観察されたのみである。本種は前年度、前々年度の調査では沿岸や沖合も含めて確認されておらず、初の出現である。日本では稀な冬鳥として北日本海上に渡来するとされるが、十勝沖では 2011 年 1-3 月に最大で 100 羽以上、2013 年 3 月にも 30

羽以上が観察されており、エトロフウミスズメ属の卓越する厳冬期から早春にかけてはそれなりの数が飛来している可能性がある。

⑨コウミスズメ

12月3日に1羽が記録されたのみだった。本種は道東太平洋では普通の冬鳥であるが、冬の前半には少なく、流氷の卓越する2、3月に数を増やし、氷縁付近で特に多い。前年度調査でも2月には101羽が記録されている。今年度の調査スケジュールでは、本種ほかエトロフウミスズメ属の渡来状況をモニタリングするのは困難であった。

⑩エトロフウミスズメ

6月27日に1羽が観察されたのみである。本種は中部以北の千島列島やオホーツク海北部等で繁殖する冬鳥であるが、道東では稀に夏に見られることもあり、本活動においても2010年7月には霧多布岬で1羽、2011年6月には沖合調査で15羽を観察している。通常は11月下旬から渡来し始め、冬の前半には数は少なく、流氷勢力の拡大する2、3月に数を増し、大群で観察されることもある、前年度調査では2月に660羽が記録され、ウミスズメ科鳥類における最優占種であった。本種やコウミスズメは国内に繁殖地はないが、北海道近海には冬鳥として定期的に渡来する。しかし、その分布や生態、個体数の動向等には不明な点が多い。霧多布近海の家鳥群集やその季節変化を理解する上でも本属の動態に関する情報を欠くことはできず、今年度は行なうことのできなかった流氷期の調査とその継続が強く望まれる。

⑪ウトウ

5～12月のすべての調査で記録された。個体数は6月27日の1296羽を筆頭に、8月3日の773羽、7月29日の595羽、8月21日の508羽と多く、6～8月に多い種であることが示されたが、前年度は9月に最大個体数(2314羽)が得られており、11月にも585羽と3番目に多い数が記録されていることから、分布やその季節変化は年によって変化することが示唆される。そうした変化の要因は不明であるが、餌資源の分布は重要な役割を果たしているだろう。今年度の最多数が記録された6月27日には、地元漁業者の聞き取りから小型のニシンが多数接岸していたとのことであり、本種はそれを追って沿岸部に飛来したのかもしれない。同日の調査では後述のようにハイイロミズナギドリも10000羽以上が記録されたが、魚食性のウトウとハイイロミズナギドリが同所的に卓越する現象は当海域でもしばしば見られており、2010年7月20日の沿岸調査(ウトウ2009羽、ハイイロミズナギドリ1324羽)、2011年9月20日の沖合調査(ウトウ2314羽、ハイイロミズナギドリ1094羽)等はその好例である。本種は道東では冬鳥であり、12月中旬までには姿を消す。11、12月の調査において8、18羽と少なかったのは渡去直前だったためであろう。浜中町に繁殖地はないが、8月3日には魚(サンマ?)をくわえて飛翔する個体が観察されて

おり（写真 52）、根室・南千島か厚岸（大黒島）のいずれかから採餌に来ている個体がいると思われる。また、嘴の細さやその前半部の黒色、小さな角、暗色の虹彩、体下面の灰しみ等が特徴的な巣立ち後の幼鳥（写真 54）は 7 月 29 日の調査で最初に確認され、8 月 3 日には何個体も観察された。幼鳥の飛翔力を考えると近隣の繁殖地からの渡来と考えるのが妥当であり、道東の繁殖地では 7 月下旬より巣立ちの起こることが予想される。

⑫ツノメドリ

寒帯北部で繁殖する海鳥で、アジア側では千島列島北部やオホーツク海北部に繁殖地がある。

6 月 27 日から 7 月 29 日までの 3 回で連続して確認され、最初と最後の 1 回はいずれも 1 羽であったが、7 月 8 日には 9 羽が観察された。本種は小島周辺や霧多布岬で年に 1、2 羽が観察されることがあり、エトピリカのデコイへの接近も見られているが、船の調査での確認は今回が初である。また、7 月 8 日の 9 羽は、一日で観察された数としては国内でも最高クラスと思われる。観察されたのはすべて嘴の鮮やかさや顔の白さを欠く、繁殖開始年齢前と思われる若鳥であった（写真 59-63）。本種の未成熟鳥は北太平洋亜北極部の広い範囲に分散しているが、夏の分布南限は南千島までとされる。今年度は霧多布だけでなく、十勝沖や厚岸沖、根室近海等でも 7 月を中心に本種の若鳥が観察され、同時期にかなりの数が北海道周辺にいたものと思われる。その要因は不明だが、7 月前半まで例年より低めに推移していた道東太平洋の海水温が影響している可能性があり、同じ時期にフルマカモメ白色型やキタオットセイ等寒流系の海鳥・海獣が例年より明らかに多く見られた。

7 月 8 日調査での 9 羽確認は非常に珍しい事象であるため、同月 18 日の地元紙において紹介された（参考資料）。

⑬エトピリカ

6 月 27 日から 8 月 21 日までの 5 回の調査で連続して観察された。数は 7 月 8 日の 9 羽を除くと 1~3 羽と少なく、前年度 7 月のような 20 羽を超える確認例はなかった。6 月 27 日に成鳥 2 羽、若鳥 1 羽が沿岸域で観察された（写真 64-67）ほかは外洋域での若鳥の単独確認であった（写真 68-69）。これらのことと前年度の結果から、若鳥は夏期の外洋に基本的に単独で分散するが、その数は年によって変化することが伺える。6 月 27 日に沿岸部で成鳥 2 羽が出現し、霧多布岬やアゼチの岬での定点調査でも 6、7 月に単独や 2 羽の成鳥が毎年観察されることから、成鳥もしくはそれに近い段階の鳥は若鳥とは異なり、6、7 月の沿岸部に飛来している可能性がある。これらの鳥が単に採餌に来ているだけなのか、繁殖のための新天地を探して飛来するのかは不明だが、このような鳥が霧多布沿岸の繁殖地を訪問してそこを選択するための環境整備が、浜中町における本種の繁殖地復活には必要であろう。

(4) ウミスズメ科以外の特筆すべき成果

① 8月3日の海鳥大群

8月3日にフルマカモメ 31484 羽をはじめ、ヒレアシシギ sp. 37129 羽、黒色ミズナギドリ類（ハシボソミズナギドリかハイイロミズナギドリのいずれか）19522 羽、ハシボソミズナギドリ 2013 羽等、これまで観察されたことのない数の海鳥が観察され（写真 89-90）、カウントされた海鳥の総数は 93865 羽に上った。これほどの数は過去の調査では確認されたことがなく、特筆すべき事例といえる。何がこれほどまでの数の海鳥を当海域に引き寄せたのかは不明だが、5 日前の 7 月 29 日には 6000 羽程度しか確認されていないことを考えると、海鳥の分布は短期間で劇的に変化し、それゆえ少ない期間や年度での調査に基づく分布や密度の推定には困難のあることが示される。このような現象が起こる要因としては動物プランクトンや魚類等の餌生物の分布が働いている可能性があり、海鳥・海獣類の分布様式を明らかにするためには、プランクトンをはじめとした餌生物や海況に関するデータも必要なことを提示している。

② ハイイロミズナギドリ大群の飛来

6 月 27 日調査は沖合で行われているサケマス流し網漁を避けて沿岸域でのみ行われたが、ハイイロミズナギドリの数百～千を超える群れが幾つも観察され（写真 111-112）、総数は 12913 羽、ハシボソかハイイロか不明だったものも合わせると更に 2515 羽が出現した。漁業関係者への聞き取りから、同時期に小さなニシンが多数接岸していたことが明らかになっており、これらを追って魚食性の本種が沿岸部まで飛来した可能性がある。同日の調査では、同じく魚食性のウトウも 1296 羽というシーズン最高数が記録されており、同様に魚群を追って霧多布沿岸域に分布が集中していたのかもしれない。

③ 8月におけるハシボソミズナギドリの卓越

8 月 3 日は上述の通り、30000 羽を超えるフルマカモメをはじめ記録的な数の海鳥が出現したが、ハシボソミズナギドリも 2013 羽が数えられ、シーズン最高数となった（写真 113-116）。本種は 4 月下旬から 6 月上旬にかけて多数が通過し、その後はハイイロミズナギドリに取って代わられる傾向があり、前年度の沖合調査や前々年度の沿岸調査ではその傾向が顕著であったが、8 月 3 日の結果は一概にそうではないことを示した。北方四島近海においては、7、8 月にも多数のハシボソミズナギドリがハイイロミズナギドリと共に残っているのが観察されており、これらが餌の分布等に応じて道東太平洋との間を広域的に移動しているのかもしれない。8 月 3 日はフルマカモメやヒレアシシギ類といった、甲殻類等の小型のプランクトンを餌とする海鳥が多数出現した一方で、ハイイロミズナギドリやウトウ等魚食性海鳥は通常とそう変わらなかったこと、甲殻類食性の本種が卓越したことからオキアミ類等の爆発的な発生があったのかもしれない。

④ミナミオナガミズナギドリ

10月8日に11羽を確認した。前年度調査でも9月20日に9羽、10月5日に1羽を確認しており、秋期には少数が定期的に飛来しているものと思われる。本種はニュージーランド近海で繁殖し、北西太平洋では迷鳥とされるが、晩夏から秋にかけては定期的に飛来している可能性が高い。洋上における本種の生態として興味深いのは、浮上個体が飛び立つ際にしばしば、尾羽を上にはほぼ90°の角度に上げて助走するのが観察された（写真103）。また、海藻をくわえる行動も度々観察された（写真106）が、これらの行動がどのような意味を持つのかは不明である。

⑤コシジロアジサシ

8月21日の調査において、海上の流木に止まる本種の成鳥2羽、幼鳥1羽が観察された（写真141-144）。本種はサハリンやオホーツク海沿岸等で繁殖し、越冬地については謎に包まれているものの、少なくとも一部は東南アジアまで渡ることが近年明らかにされつつあり、中継地である香港や台湾での記録も増えつつある。日本においては迷鳥とされるが、繁殖地、越冬地の地理的条件を考えるとそれなりの数が通過していると考えるのが妥当である。道東太平洋においては2010年以降、5例10羽を確認している。記録は8月中・下旬に集中しており、同時期に沖合を通過しているものと思われる。上記5例10羽のうち、3例7羽は成鳥と幼鳥が同時に観察されており、繁殖地を出発後も成鳥と幼鳥が一緒に行動している可能性がある。したがって、飛翔力のある段階の幼鳥と成鳥の観察記録をもって繁殖可能性を示唆するのには慎重になる必要がある。

⑥オオトウゾクカモメ

7月29日（写真145）ならびに8月21日の調査で各1羽が観察された。これまでの活動では2011年8月に岬定点で1羽が記録されただけで、船による調査では初の記録である。十勝沖の海鳥調査では、2012年は8～10月に度々記録されており、例年より多く、道東近海に飛来していた可能性がある。このような年による海鳥の分布の違いとその要因を探ることは、海洋生態系の動態を解明する上でも重要な意義を持つものと思われる。

⑦12月3日の鳥相について

12月3日はミツユビカモメ（777羽）、ウミスズメ（320羽）が優占する海上鳥類相であった。この、ミツユビカモメとウミスズメが優占する鳥類相は、キタオットセイやシロエリオオハム等と共に1～3月の三陸沖から鹿島沖において特徴的な海鳥・海獣相である。厳冬期の本州東方海上で特徴的な鳥類相は、12月上旬のこの時期に道東太平洋を南下し、それらが本州沖に到達する1、2月にはエトロフウミスズメ属を中心とする海鳥相に移行することが、本調査の結果から伺えた。

第2部 海獣類その他

海獣類ではラッコと2種の鰭脚類ならびに6種の鯨類が確認された。ラッコは12月3日にホカケ岩近海で1頭が確認された。鰭脚類のうち、ゼニガタアザラシはホカケ岩周辺で上陸ならびに遊泳個体が確認された。必ずしも干潮時に調査しているわけではないので、個体数の変動は季節変化を反映したものとはいえない。10月以降の確認がないのは、高波や日中にあまり引かない潮回りによるものと思われ、当地域からの消失ではない。上陸個体は写真撮影してある(写真169-174)ので、ゼニガタアザラシ個体識別データベースへの登録によって近隣上陸場との移動や出現履歴等、生活史解明への貢献が期待される。キタオットセイは中部以北の千島列島やコマンドル諸島等、北海道より北で夏に繁殖する種であるが、5~8月には常に確認され、7月8日には19頭を数えた。これらは小型で性成熟前の若獣であると思われたが、同時期にこれほどの数が観察されたのは本活動を通じて初めてのことであった。7月前半までの道東太平洋は海水温が低く、ツノメドリやフルマカモメ白色型が例年より多く観察されたことと関係があるのかもしれない。

鯨類は6種が観察されたが、ネズミイルカとイシイルカはほぼ恒常的に観察され、この海域に定住していることが示された。前者は沿岸域、後者はやや沖合に分布していると思われるが、詳細については今後の解析を待つ必要がある。12月には4頭のザトウクジラが観察された(写真153-156)。十勝沖や釧路沖でも春秋を中心に観察されており、繁殖海域である北太平洋低緯度海域と索餌海域である同北部やベーリング海との回遊のルートとして道東太平洋を利用している可能性があり、画像による個体識別によって他の海域との繋がりを明らかにできる可能性がある。前年度に引き続いてシャチの群れが観察され、しかも今年度は2回見られた。12月3日の観察時には約50頭のイシイルカの群れに明らかに接近するのが観察され、確認された個体が背鰭の尖った海獣食性のトランジェントっぽい形態を示したことと合わせて捕食行動の可能性が示された。イシイルカは相当のスピードで遊泳し、一部は船のすぐ脇まで来たことからシャチから逃避していたものと思われる。なお、この時観察されたイシイルカはいずれも、体側下面の白色部の広いリクゼンイルカ型であった。根室海峡では、観察される本種の多くがイシイルカ型であり、道東海域における二型の分布とその特質については今後の更なる研究が待たれる。

また、海獣類以外にも目に付いた魚類や昆虫類を記録した。マンボウやサメ類は7~10月の海水温の高い時期に記録された。同時期は、海鳥ではクロアシアホウドリ、オオミズナギドリ、カンムリウミスズメ等の北太平洋低緯度海域で繁殖する種が多く出現するのと同期しており、黒潮系水塊の北上と関連しているのかもしれない。ラッコや複数種の鰭脚類にくわえて、多くの鯨類が観察できるのは国内でも道東太平洋くらいのものであり、霧多布や厚岸を拠点にかつて捕鯨が盛んに行われていたことを考えれば、多くの海獣類が今後も観察できると期待される。これらやウミスズメ科鳥類、ミズナギドリ目鳥類を活かし

た地域振興も、これからの海鳥・海獣類と地域社会の共生の手段として検討されても良いだろう。

【参考資料】

金川路新報

平成24年(2012年)7月18日(水曜日)



今回確認されたツノメドリの若鳥 (NPO法人エトピリカ基金提供)

ツノメドリ9羽確認

浜中エトピリカ基金洋上調査

調査は地球環境財団の助成を受けて行っているもの。同基金では3年前から沿岸、昨年から沖の調査を行っている。今年は今月8日に実施。霧多布から釧路・根室管内の境界線あたりの沖合35㌾までを航行し、海鳥を観察した。

今回はツノメドリのほか、町の鳥エトピリカの若鳥も7羽見られた。昨年はエトピリカは21羽を見ることができたが、ツノメドリは0羽。どちらの鳥も通常は群れをつくらず、単独で行動する。成鳥になるとエ

通常群れつくらず単独行動

調査は地球環境財団の助成を受けて行っているもの。同基金では3年前から沿岸、昨年から沖の調査を行っている。今年は今月8日に実施。霧多布から釧路・根室管内の境界線あたりの沖合35㌾までを航行し、海鳥を観察した。

トピリカは目の後ろの飾り羽やくちばしが濃いオレンジに変化し、6-8月の繁殖期になるとつがい移動。昨年は沖合に浮かぶデコイにあいさつ行動をしている様子も確認された。

一方ツノメドリは、カムチャツカ半島や千島列島といった北太平洋が主な生息地で、国内ではほとんど見られない。同基金によると「まれに年に1、2羽を見かける程度」といふ。成鳥は顔が白く、くちばしが鮮やかな黄色とオレンジに変わり、目元は角が生えたような模様ができる。

若鳥は腹部が白色である以外、黒色と地味な外見で、他の海鳥との判別が難しい。今回は全て繁殖期ではない若鳥で、沖合10-20㌾の海上で羽を休めていた。片岡理事長は「まさかこんなにいるとは驚き」と振り返り「今年は海水温が低く、分布域が広がったのではないかとこの見解を示す。同基金では今月下旬にも同様の調査を行い昨年とのデータを比較する計画だ。」